

にいがた老舗物語

小島塗装店は1989年、有限会社設立を機に小島清介社長(76)の自宅近くに社屋を構えた。その間、清介社長は建築のほか木工、鋼橋の1級塗装技能士の国家資格を取り、公共工事の割合を増やしていった。木材のチップを固めて作った「新建材」の普及で新築住宅の塗装工事がほとんどなくなったからだ。しかし、90年代のバブル経済崩壊後は公共工事も減り、下請け工事の売り上げも落ち込んだ。毎年400万〜500万円程度の赤字決算が続いた。累積赤字は10年で約3千万円に膨れ上がった。赤字体質の経営を打開しようと、一般住宅や公共施設修繕塗装の元請けを増やすなどして2006年、ようやく黒字に転換した。

04年には株式会社化し、現在は20〜62歳の従業員12人と事務員の計13人が働く。工場の規模に同じ、従業員を3、4のグループに分ける。各グループにはリーダーを置き、現場を監督する。複数の作業グループを編成することで複数箇所の

確かな職人仕事 小島塗装店 (上越市) 4

他社と連携 若手育成



山門の一部が修復された五智園分寺(上越市)

仕事を請け負うことができないから。自社の従業員だけで賄えない規模の工事を手掛ける際は、他社に応援を頼んでいる。他社の従業員に現場リーダーを務めてもらい、その下に自社の従業員を配置することもある。

清介社長は「リーターは脳内出血で倒れた。一命は取り留めたものの、右足にしびれが残り、「いくらお金をかけても自分の体はも

山門修復 地域に貢献も

つながら」と語る。社長自身も現場を回り、仕上げ具合を見ながら若い職人に塗りの技術を伝える。従業員の見計らいながら、資格取得を勧めている。そんな時、祖父の外吉によく連れて行ってもらった上越市の五智園分寺を思い出した。山門は朽ちてきたが「材料があれば修復できる。仕事で利益を上げるのも大事だが、お金では替えられないものがあることを悟った」。これを機に小島塗装店は地域への「恩返し」に積極的に関わろうとする。

2005〜08年に五智園分寺の上越市の文化財に指定されている山門の一部を修復した。材料や手当はすべて自社で賄い、従業員にも手伝ってもらった。修復に当たり、奈良県の薬師寺の道を歩んでいる。それでも「後継者の育成や共同経営など、あらゆる可能性を探って看板を守る。塗りをしっかりすることで構造物を長持ちさせられる。インフラの維持管理上でも塗装業は重要な役割を担っている」と力を込めた。



「仕事に誠実に向き合う大切さを若い人に伝えたい」と語る小島清介社長 (おわり)